

彼岸雑記 — 太田勘左衛門のこと —

館長 富岡敬之

このところ雑務繁忙で、自分の時間もなかなか得られない。そこを何とかするのが才覚というものであろうが、その才覚に恵まれない私は、とうとう彼岸のお墓まいりも家内の代参ということでお茶をにごしてしまった。遠い田舎にあってはそういうことにもなりかねまいと、わざわざ岡山に小さな墓地を買い求めた亡父の配慮を、不肖な息子は無にしてしまったような次第である。

墓参といえば、かつて岡山市国富の少林寺にある伊木三猿齋の墓に詣でたことがある。三猿齋といえば、岡山藩の家老として、困難な幕末政局に処して藩論を勤王にみちびき、また茶人としても知られた周知の人物であり、茶筌を形どった墓前の花筒は、いまま故人の風流を伝えている。

ついでといつては悪いが、そのとき付近に散在する旧伊木藩士の墓地にもおまいりした。というのは、当時、後に明治初期の文明開化のリーダーの一人となった西周と深い交渉を持っていた松岡隣（伊木氏の家臣）の事蹟について関心があったからである。

そのとき、松岡隣の墓所は発見できなかったが、たまたま松岡隣の作った墓誌銘を持つ太田勘左衛門という人の墓碑を見出した。松岡隣の撰文ということでノートに書き取りはしたものの、当時の私は太田勘左衛門について何一つ知るところがなかった。

岡山大学所蔵の池田家文庫にある奉公書から以下のことが確かめられた。太田勘左衛門盛房は、伊木忠澄（三猿齋）家臣として知行70石、文政12年（1829）より嘉永2年（1849）に至る20年間、虫明御米蔵奉行をつとめた経済官僚であったこと、嘉永6年（1853）黒船来航による房総沿岸警備出動に際しては京坂の間に奔走して軍資金を調達したこと、沿岸警備出陣中に病氣となり安政2年（1855）3月6日（系図では3月4日）江戸において病没した、などの経歴である。

少林寺住職に聞いて、ある日、後裔の太田一郎氏をお訪ねした。不意の来訪者をこころよくお迎えくださった御当主は、『太田系図』一卷を見せられたうえ、その筆写を快諾された。それによって見れば、太田家の出自は

尾張国（愛知県）太田であり、初代新左衛門某は勘左衛門とも称し、はじめ織田家に仕え、天正年間に至り三河国田原において伊木家に奉公したという。その後7代を経て勘左衛門盛房の代となるのであるが、この人物は養子であり、作州勝山藩主三浦家の老臣佐藤内蔵太の次男であった。

ところが、この系図には「盛房父母之由来」と題する付紙があり、次のような興味深い話を伝えている。「父内蔵太悼某へ三浦公姫君ヲ被下、兼テ家富ミ勢イ盛ナル処ヨリ、他ノ讒言ニ依テ、姫君御取上ニナリ、弥讒言甚敷、公迎之御仕向ケ道ナラザルニ依テ、……終ニ勝山退去後備前へ来ル」ことになったもので、その次男が縁あって太田氏に入ることになったというのである。佐藤内蔵太の勝山退去がいつのことであったか明らかでないが、勝山藩の『天保9年分限帳』には御徒目附格佐藤作之進の名前がある。しかし同族かどうかは不明である。

門閥重視の封建社会にあっても、江戸末期の緊迫した政局下においては、能力や才覚のある下級武士層を重用せざるを得なかった。浪人の次男から太田家に入った勘左衛門盛房の経済官僚としての活躍は、やはりこの路線上にあったものと考えてよいのではなかろうか。



伊木三猿齋の墓

昭和54年度 特別展

「備前焼—その流通と時代的特色—」を終えて

(S54.10.9~11.4)

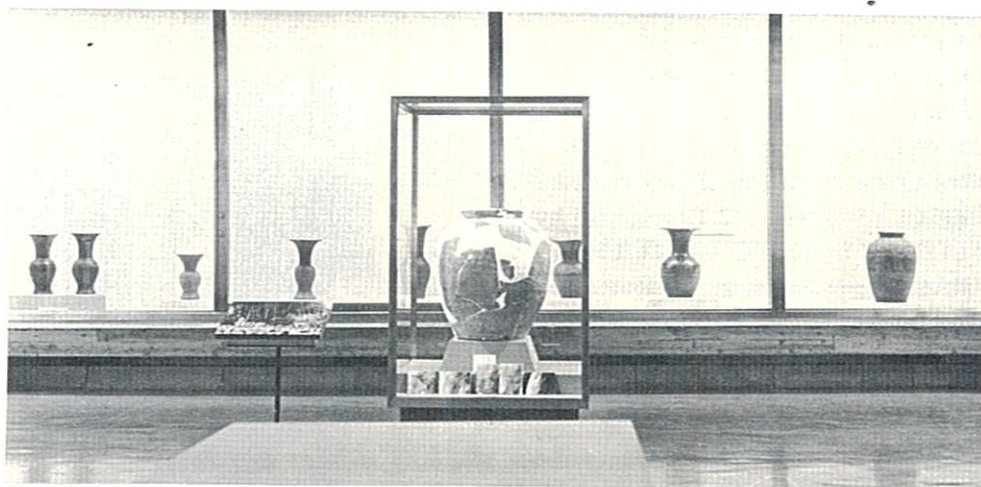
国道2号線で、東から片上トンネルを抜け、急に眼下に広がる伊部の里を認めた時……。ああ今、数百年前の備前焼をこの手で里帰りさせているのだなあ……と胸に高い鼓動を覚えた。出荷された当時の伊部の里を知っているのは、この甕や壺だけかも知れない。その昔、どのようにして全国へ運び出されたかルートは定かではないが、今美細車で誕生の地へ彼女達は帰ってきたのである。展示品を集荷した時のことである……………。

今回の特別展はフィールドを県外に広げた最初の試みであった。備前焼は中世古窯の一つとして、広く全国的に知られ、日用の器として親しまれてきた。それだけにいつかは広域調査に基づいた「備前」の展示を行なう必要があった訳である。その上、近年各地で中世遺構の発掘調査がどんどん進められてきたことは喜ばしいことである。現在中世備前焼の出土例は今回の調べによって、ほぼ全国では300件に達している。そこで、この特別展を意味あるものにするために、まず、全国から報告された事例をできるだけ多く我々学芸員の眼で確かめる事が当然必要となってくる。東限等の境界線上に位置するものは、やはり確認が非常にむづかしく困難をきわめた。フィールドを県外に拡げても例年と同じ予算枠だから、できるだけ実現せねばならぬということとの間で苦闘が始まったわけである。多くの確認ミスがあったにちがいないが、短期間に非常に多くの遺跡や出土備前を比較し

ながら見たことは、苦闘の代償として余りあるものがあつたと思っている。何はともあれ、今回の調査展示は、全国の博物館、教育委員会、研究者の方々が、並々ならぬ協力の手を差し伸べて下さったことが、何より大きな原動力になった。これらの調査をふまえ、年紀銘のある備前焼や文献資料などによって、中世から近世に至る備前焼の流通と時代的特色を明らかにすることに努めた。まず分布図と東限、西限の問題、内的なものとしての地域性と器種の問題、大消費地京阪、根来、草戸千軒の姿、初めて明るみに出た淡路島の相当量の備前焼と分布、また和歌山県や淡路島にある備前、吉備、伊部、小豆島等々の地名にも多く直接ふれ知ることによって、とにかく驚くことばかりで、今後の課題も探ることもできた。最近伊部の窯跡から出た非常に古い底の平でない、大甕の陶片をみたり、備前焼研究と云うものが蜂の巣の殻構造のように、全体の形はほぼできていても、まだ埋めなければならない空洞の部分が多くあるように思える。とりわけ

1. 備前焼の大量消費地からみた、備前焼の時代的編年と生産地（備前焼窯跡）の研究
2. 中世備前焼の分布にみる大量生産とその用途
3. 近世備前焼の生産統制とその流通などはこれから特に重視してとり組む必要があるような気がする。

(白井洋輔、浅原 健)



特別展々示風景

手前は和歌山県長寿寺の

暦応5年(1342)銘の大瓶

特別展記念講演

(S 54.10.20)

1. 中世茶の湯の普及と備前焼

仏教大学教授 水野恭一郎氏

中世の茶の湯が闘茶など、芸能として発展する歴史の中で、備前焼がどのように普及したかを各古文書類の中から具体的例をあげながら講演された。

2. 備前焼の成立と発展

倉敷考古館々長 間壁 忠彦氏

考古学の中で、中世へのとり組みは遅れていた。とりわけ中世の陶磁器研究で、備前焼は他の古窯に比べ、非常に遅れていた。そのような中で年代の序列の確立を痛感し、いかにして氏がなしたか、またどのように備前焼が普及していったかを豊富な研究実績をふまえて講演された。(白井洋輔)



「楯築墳丘墓」

(S 54.11.20~12. 9)

倉敷市矢部～西山の径40数mの円丘のはは東西に突出部を設けた弥生時代後期の墳墓が昭和54年春の発掘(楯築墳丘墓調査団・団長近藤義郎岡山大学教授)された。

頂部には一面におかれた円礫の他、巨大な立石がたてられ、斜面には列石が並ぶ。この発掘によって、中心部に、木棺(長約2m・巾約70cm)とその外まわりの木組み(木槨)の痕が発見された。棺床には30kg以上に及ぶ朱が置かれ、遺骸頭部付近に2組の首飾、1口の剣、多数の細身の管玉とおびただしいガラス小玉が副えられていた。また、棺槨上方の円礫中から土製の管玉・勾玉、人形土器、曲線文を彫り込んだ石などが出土し、また石造りの排水施設も発見されるなど種々の点からみて、弥生時代後期の大首長の墳墓と推定される。

なおこの東南約数mの個所には割竹形木棺の埋葬が発見されている。(浅原 健)

主な楯築墳丘墓展示品

- | | |
|-----------------------------|----------|
| 1. 特殊器台 | 1. 鉄 剣 |
| 1. 彫刻文様のある石
(古称竜神石・俗称亀石) | |
| 1. 壺 | 1. 土製玉類 |
| 1. 朱 | 1. 人形土器 |
| 1. 玉 類 | 1. 各種パネル |



「豊彦と義董

— 岡山の四条派 —

前号で予告のとおり、テーマ展「豊彦と義董— 岡山の四条派 —」を開催(2.5~3.9)することができた。岡本豊彦・柴田義董はともに郷土出身の四条派画人として知られ、県内各所に遺作が伝わり、愛好者も多い。しかしながら、これまで、まとまった紹介がなされておらず、今回は小規模ながらその先鞭をつけたものといえよう。また期間中には、作品の所在についてのご教示も賜っている。現在、本館では、豊彦門下の塩川文麟・柴田是真・古市金峨・義董門下の小野雲鶴・大原吞舟らの作品のテーマ展示を企画している。

岡本豊彦(1773~1845) 現倉敷市水江の出身。

山水画を得意とした。

柴田義董(1780~1819) 現邑久町尻海の出身。

人物画を得意とした。

(守安収)

展 示 目 録

- | | | | |
|------------------|--------|----------------|-----------|
| 1. 七福神図 | 1幅 | 呉春・景文・豊彦・義董ら合筆 | 個人蔵 |
| 2. 鱗介図 | 1幅 | 景文・豊彦ら合筆 | 個人蔵 |
| 3. 豊彦自筆書状 | 1巻 | | 本館蔵 |
| 4. 菊慈童図 | 絵馬1面 | 豊彦筆 | 邑久町若宮八幡宮蔵 |
| 5. 桐鳳凰図 | 絵馬1面 | 豊彦筆 | 豊彦筆 |
| 6. 菊 図 | 1幅 | 豊彦筆 | 邑久町若宮八幡宮蔵 |
| 7. 船 図 | 1幅 | 豊彦筆 | 豊彦筆 大國隆正賛 |
| 8. 雨中山水漁父図 | 1幅 | 豊彦筆 | 個人蔵 |
| 9. 秋景山水図 | 1幅 | 豊彦筆 | 個人蔵 |
| 10. 山水図 | 襖4面 | 豊彦筆 | 本館蔵 |
| 11. 山水図 | 6曲屏風1双 | 豊彦筆 | 個人蔵 |
| 12. 妓女図 | 1幅 | 義董筆 | 頼山陽賛 |
| 13. 武陵桃源図 | 1巻 | 義董筆 | 本館蔵 |
| 14. 騎馬武者図 | 1幅 | 義董筆 | 個人蔵 |
| 15. 柳陰馬人物図 | 1幅 | 義董筆 | 亀田鶴斎賛 |
| 16. 唐人物図 | 2曲屏風1隻 | 義董筆 | 個人蔵 |
| 17. 墨戲清秀画卷 | 1巻 | 豊彦筆 | 本館蔵 |
| 18. 群仙図 | 1巻 | 義董筆 | 個人蔵 |
| 19. 平安画家名字録 | 1点 | | 個人蔵 |
| 20. 展観画録(応挙13回忌) | 1点 | | 個人蔵 |

神郷・西栗倉の巡回展

神郷会場 54.11.17～11.20

西栗倉会場 54.11.22～11.25

巡回展は本館の普及事業の一環として、日ごろ疎遠となりがちな地域の皆さんに、精選した館蔵資料を鑑賞していただくという試みである。昨年の高梁・久世展にひきつづき、本年度は神郷町公民館・あわくら会館の二会場で実施した。両会場とも、地元教育委員会の熱意もあり、住民のおよそ三人に一人が詰めかけるという盛況であった。

出品目録

- | | | | | |
|-----|-----|-------------------|----|------------|
| 考古○ | 1: | 石 枕 | 1点 | 古墳時代 |
| " | 2: | 家形骨蔵器 | 1点 | 奈良時代 |
| 絵画 | 3: | 法然上人伝法絵断簡(上人臨終の段) | 1幅 | 鎌倉時代末期 |
| " | 4: | 図 像抄 | 1巻 | 鎌倉時代末期 |
| "○ | 5: | 宇喜多能家像(九峰宗成賛) | 1幅 | 大永4年(1529) |
| " | 6: | 青壁茅亭図(広瀬台山筆) | 1幅 | 江戸時代後期 |
| " | 7: | 妓 女 図(柴田義董筆) | 1幅 | 江戸時代後期 |
| 工芸 | 8: | 草花時絵螺鈿櫃 | 1合 | 江戸時代初期 |
| " | 9: | 金 工 品(正阿弥勝義作) | 2点 | 明治時代 |
| 文書○ | 10: | 足利尊氏御教書 | 1幅 | 南北朝時代 |
| " | 11: | 本蓮寺文書 | 1括 | 室町時代 |
| " | 12: | 小堀遠州書状 | 1幅 | 江戸時代前期 |
| " | 13: | 蘭学資料 | 1括 | 江戸時代後期 |
| 工芸 | 14: | 備前焼 播鉢(水の子岩海底出土) | 2点 | 南北朝時代 |
| " | 15: | 備前焼 火禪大徳利 | 1点 | 桃山時代 |
| "○ | 16: | 太刀銘正恒 | 1口 | 平安時代末期 |
| 民俗 | 17: | 熊野染夜着 | 1領 | 江戸時代後期 |

○印は県指定重要文化財

(守安 収)

成人大学講座

成人大学講座を10月12日から12月7日の間、週1回実施。博物館資料に触れながら岡山県の歴史と文化を学習できるというユニークな講座として好評を得た。平日のため、受講生はご年配の方々が多いが、出席率もよく、非常に熱心に学習された。内容は下記のとおり。(守安 収)



閑谷学校椿山を訪ねる

学習内容

部門	テ	マ	講	師
総合	博物館の仕事		学 芸 課 長	浅原 健
考古	岡山市百間川遺跡の調査		文化課文化財 保護主 査	正岡 睦夫
総合	特別展「備前焼」 —その流通と時代的特色—		学 芸 員	臼井 洋輔
歴史	中世茶の湯の普及と備前焼		仏教大学教授	水野恭一郎
総合	閑谷学校と備前焼<現地見学>		主任学芸員	柴田 一
民俗	児島湾の漁業		学 芸 員	臼井 洋輔
美術	岡山の絵画		主 任	竹林 栄一
工芸	岡山の近代工芸		学 芸 課 長	浅原 健
歴史	岡山県の歴史と県民性		主任学芸員	柴田 一
総合	由伽山蓮台寺とその周辺 <現地見学>		主 任	竹林 栄一
歴史	豊原庄と弘法寺		学 芸 員	守安 収
考古	古代の岡山		主任学芸員	柴田 一
歴史	西周と岡山洋学		岡山大学教授	近藤 義郎
			館 長	富岡 敬之

岡山県立博物館だより

No. 14

発行日 昭和55年3月31日

発行者 岡山県立博物館

館長 富岡 敬之

岡山市後楽園1-5

☎(岡山)72-1149